

文学研究科図書館における遡及入力取り組みについて

文学研究科整理掛

文学研究科図書館では、現在、大規模な遡及入力事業を実施中で、蔵書約95万冊をオンラインで検索できるように作業を進めています。2007年9月末現在、入力率は65%を超え、かなりの蔵書がオンラインで検索可能となりました。当館における遡及入力の取り組みをご報告します。

<法人化以前>

1906(明治39)年、文科大学として開設されて以来100年間、先人が嘗々とした努力を積み重ねてきた結果として、文学研究科図書館は京都大学の図書館・室の中では最大の蔵書量を持つ図書館となっています。

1985年、京都大学として全国総合目録データベースにデータ入力を開始して以来、当館においても新しく受け入れた資料を入力する傍ら、遡及入力にも努めてきました。また、全学経費による遡及入力支援や、NII(国立情報学研究所)の遡及入力事業を活用するなど、外部からの働きかけにも積極的に応じてきました。しかしながら、1万冊入力しても1%上がるだけという入力率は、2003年度末の段階でやっと30%程度にしか至らず、「まず目録カードを検索し、ごく最近のものを探す時はオンライン検索を行う」という古色蒼然とした検索パターンが定着していました。^{*1}

<法人化と遡及入力事業>

転機となったのが2004年4月の国立大学の法人化でした。第1期(法人化後最初の6年)「中期目標・中期計画」が策定され、「所蔵図書

の遡及入力を推進する」という目標もその中に掲げられました。さらに、大学の資産である図書の管理をより徹底すること、つまり、定期的に蔵書を点検し、帳簿上の資産が実際に存在するかどうかを確認することが求められました。遡及入力を行うことで資産調査にもなり、また第2期以降の資産調査も効率的に行えるということで、遡及入力が重要かつ緊急課題へと浮上したのです。2005年3月、当時の藤井譲治研究科長の尽力により、遡及入力事業のために研究科として相当額の予算を配分することが教授会で了承されました。

一気に加速された遡及入力は現在も続いており(図1)、第1期「中期目標・中期計画」期間中に終了させるべく、職員一丸となって取り組んでいます。

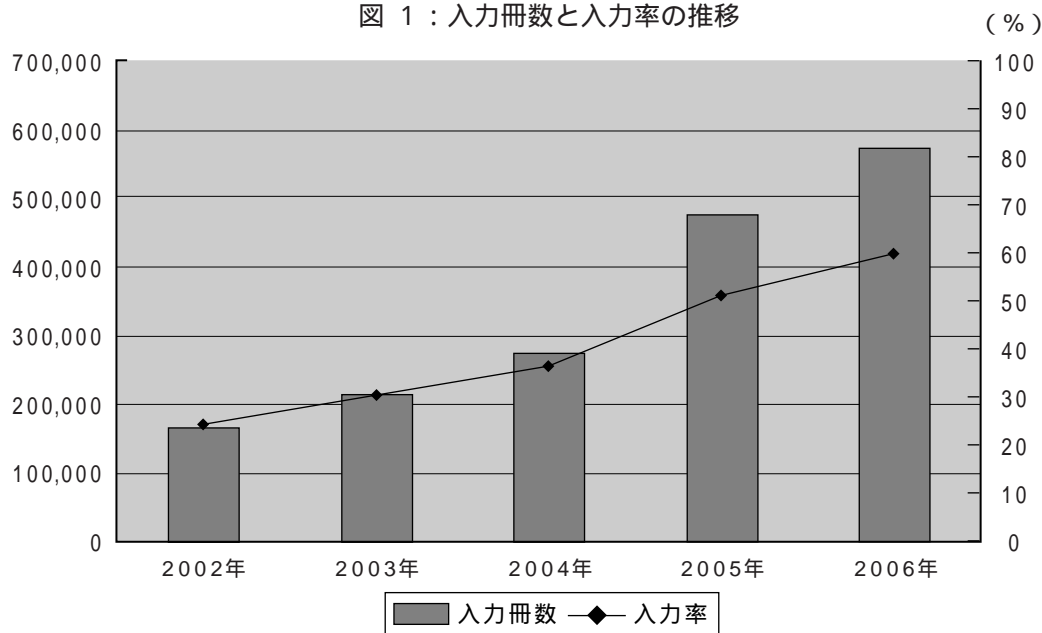
<遡及入力事業計画と実施状況>

文学研究科の遡及入力事業計画は、年間76,000冊を入力する 要員として8名を雇用する 1年ごとに評価・見直しを行う というものですが、実施にあたってはいくつか工夫が必要でした。

当館の蔵書は、100以上の多様な言語で構成

*1 「文学研究科図書館紹介」(「静脩」vol.42(1), 2005)

図 1：入力冊数と入力率の推移



され、資料形態も多岐にわたります。蔵書の20%近くは和漢古典籍、地図資料、拓本等で、目録の作成に時間がかかる資料です。英語はもとより、ドイツ語、フランス語、イタリア語等の古い図書が相当数あります。

まず、要員として語学力のある遡及入力経験者を確保しました。語学に堪能な院生さんも貴重な戦力となってくれました。デーヴァナーガリー、ハングル、アラビア文字資料等の多言語資料の入力は、NIIの遡及入力事業に応募して採択され、実現しました。

入力する順序については、未入力の資料を端から行うのではなく、書庫内の比較的よく使われるであろう資料、具体的には戦後刊行された資料を優先しました。これは、戦後の資料は既にデータベース上に多くあり、活用しやすいという作業効率の部分と、まずは利用者の利便性を高めるというサービスの部分との二つの意義がありました。

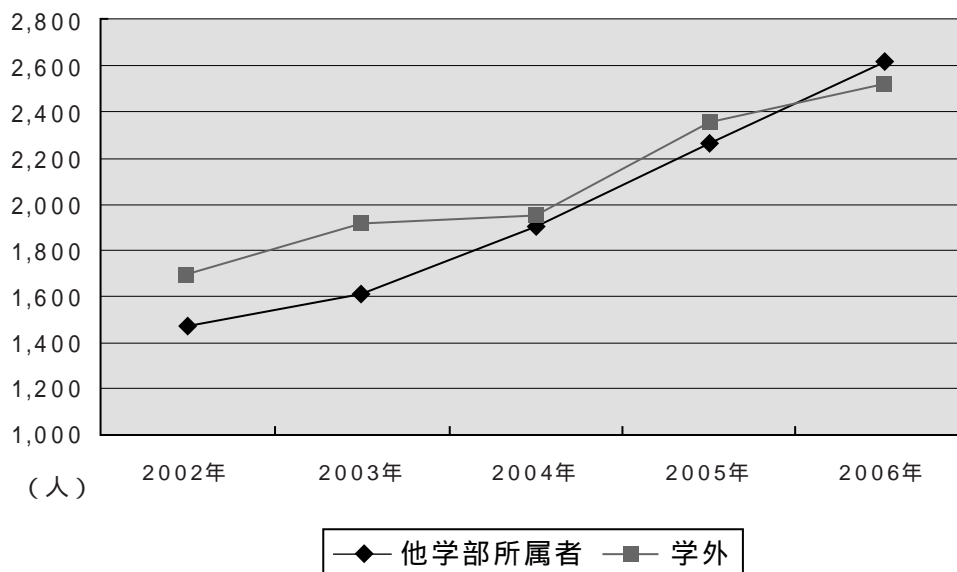
利用統計を見ますと、他学部所属者は2004年、それ以外の外部利用者については2005年以降、閲覧利用が大きく増えていっていることがわかります(図2)。文学研究科の教職員・学生の貸出冊数も増えましたが*2、遡及入力が進んだことで、オンライン検索などで資料を調べてから利用しに来る他学部・外部の利用者にとって、大きな影響があったと言えます。

1年目の2005年度には約12万冊を入力(図3)、入力率は50%を超え、ようやく「OPACで検索できない場合はカード目録を検索してください。」という案内ができるようになりました。2年目からは古い洋図書の入力を中心に、書誌の作成件数が増えて年間1万件を超えましたが、作成した書誌のチェックも終わらないうちに資料の問い合わせがあり、オンライン検索の威力を実感しています。また、古い資料が多いだけに破損資料も多く、職員が業務のあいまに修理製本に励んでいます。

*2 利用統計は文学研究科図書館ホームページでご覧いただけます。

<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/lib/index.html> 図書館について 統計(1)閲覧・貸出

図 2：閲覧件数の推移



<今後の課題>

遡及入力事業も1年ごとに評価・見直しを行いながら3年目となり、一つの区切りを迎えて次の段階へと移行する時期に来ています。和漢古典籍、特殊言語資料を除けば書庫内の資料は90%近く入力が終わったことから、書庫以外の場所（羽田記念館・各研究室など）に配架されている資料の入力も始めています。

先生方や学生さんの協力が不可欠です。和漢古典籍等の入力は、いよいよこれからが本番となります。遡及入力も資産調査も、これからが正念場と言えます。また、「人文知の拠点」としてふさわしい図書館をめざす上では、遡及入力の実施のみならず、電子化資料を含めたコレクションの充実、資料保存、書庫の狭隘化対策等も今後の大きな課題です。

図 3：遡及入力冊数推移(言語別)

言語 年度	日本語	中国語	英語	ドイツ語	フランス語	イタリア語	ロシア語	その他	合計
2002	393	4,598	1,722	1,193	941	121	1,526	228	10,722
2003	14,998	20,901	2,370	2,275	1,242	189	230	331	42,536
2004	13,495	15,101	7,362	2,788	1,802	149	929	2,226	43,852
2005	46,614	12,788	25,584	16,098	9,896	4,958	1,291	9,159	126,388
2006	24,053	4,297	22,176	20,428	12,075	1,039	669	2,943	87,680

注:合冊製本されたものは製本前の冊数で数えたため、他の統計と誤差が出る場合がある